



枕詞  
六

5  
1217  
6





5  
1217  
161



園防

三田麻塔溪

表八句

鶏啼く芳るふるゆめを葉菜の如

有時  
此中

月の氣葉の白小 山 里 交起

亦等く此法此秋の入らるる 花 芝

悟氣の角々今も 近き 吹 芦 吹

身素くも有する 幸 次 信 松

名の中一も 荒果と志 契 琴 止







ウ

入船のあはれをよみよみとてくさ

一代

ふ徳の今も祖傳の心を忘

其業

脱替し紙をよみよみとてくさ

以水

紙をよみよみとてくさ

産二

啼はくハ声の遠いよきと鶴

菊重

昇りすよきよきとてくさ

此程

と屋のふあ附も此の事如性

李漢

遠くよみよみとてくさ

海と

二

くせくらよきよきとてくさ

味友

瓶の置れかきとてくさ

二房

瓶のと汗の層もよきとてくさ

此流

まよきよきとてくさ

け器

清くよきよきとてくさ

蓮海

酒料和傾の境海もくさ

家井

飲喰のよきよきとてくさ

来り

相撲はよきよきとてくさ

以交



う

一里と云ふところ十町 出府

千子の塔に纏れ朽せぬ 春友

咲くよき花も白ふとの比 叶香

花のり花は御まふと 和永

其二八句表

月亭下  
叶香

入初る月影細く麻の声

流石とすく小娘のやき 夏花

金蔵一巻の秋をうらや 中野房

響ぬよの虫の鳴りあり 吹水

河舟も大い枝木引出 叶流

長巻くしきうと月影 遠海

大巻か始まぬりて並段中 只吹

とくも鳴や春の上の巻 清と

名塚

杯もく縁に鏡よ紙衣ふ 只吹

雨のりも雨ふるるり 柳 叶香



水りりりき川を首井、雪の糸  
 の糸  
 下戸もよれ上りてをうし逆極  
 晴む  
 眺あぬ穀や好して小生月  
 以流  
 去ふも水はほくもあけもあわ  
 和氷  
 中の春ふまは秋やあはれ月  
 以氷  
 雪の初言やまきしき谷の倉  
 倉二  
 舟ううてくくもあけぬ日ふ  
 倉井  
 何ん人も孰くふ川秋のそり  
 一代

草もよ小菰水壺ア月くく傳  
 以友  
 藤垣焚く煙も水くくこの秋  
 遊河  
 葉もゆりそくくや秋くく  
 以葉  
 中野やあぬ人ともあそひ合ひ  
 以友  
 人え小乳母を泳鼻の故性水  
 以友  
 川杯くくもくく世信もくく  
 文魯  
 知丁や隣子めくくも雪くく  
 文魯  
 晴くくもくくあそびあり雪の海  
 二五佳



頁しん田舎の月やきんけむ

西浦 標子

其の月も輝ふまをききよ

口信 一志

物のみよ藤をききよるおの

口 けん

ふくのふたはほくしむをきよ

口 けん

さきくても明あふとよ卯木

口 辰林

帯も心わくく時をきよる月

中葉信 けん

舞あや小ぬきくく後とよあ

口廿 藤原

松一と木もよ目ききよるの香

口廿人 志

おの月く時くくききよる声

口 の花

香井く後くくお 辰中くお

志 辰

字務よききよるの時白うら

けん

秋の月ちちききよるおの香

志 辰

都云くと声ききよるおの香

志 辰

源くおや言一ぬききよる

志 辰

けんおく二三日故懐れおの香

志 辰

三田庵



維多利亞

松蔭會

龜膽

網や法とめて度長其の院

枝のふふ急、月之言を

香ふ白ふ葉の節白ふるもあて

中華もせめて荒 聖此候

以流われ俄 新地のはあてり

被ハ 好く けふ 好 せり

中殿ふふ名 越此方の端 勝り並

夏丸

茶漬園

蕉由

好睡

飲古

相冠

町安よおのこころへ 暖

浴舎

着 延下ふふ 葉 並一 全ふ

礎 祐

方了の 温泉下り ぬ乳 夏に

美 吉

ほろく 春 暖 比と 柳 移り

新 眺

山 崎 木 介 不 月 の 初 り

初 時 由

清 如 高 一 穂 衣 持 ち 冬 不 去 ち

危 角

さねて 去り 中 原 此 醫 者

乙 柳

障 子 下 雪 や 言 教 代 ぬ り こ ころ

長 葉

二



庭の焼籠と暮らくり 五無

田のくもも静なりん 是れも夜 以く

来りあををまほしき海に三 柳を

此のふるふ、食中の月れさす 斜 小無

くくくくくくくくくくくく 等所

牙匠殿へもて見方へ刀自れ 微中

包ととそわ何らりり物 礎石

八三三三三三三三三三三三 糸后

沼しとゆわりのふも 糸后 逸無

其二とら書

月令会

乙月十後口のふも 別海 糸后

友もあひりー中級のも 変た

お等ふ非代代秋の添ふれて 鳥籠

かんくも 添ふんのも 添 里無

英あふをそ我雪井くくく 宜無

径の一字れ 笠巻くとも 波無



其二 三ツ物

其巻圖

この頃中ふ加りぬ小舟の風

雄雌

月影ほそくゆくゆの葉へ

交配

若思ゆくそぬこの宿目えらへ

葉月

宮市

其四 歌合

雨澤亭

其行

空野こそ懐もぬけて塵の声

月影ふ別一月の心経

交配

控へ漏れぬまふまぬのまゑきて

危睡

吹風へくまふ

白風

平神よす成るなほくまぬとて

其月

わくまをさるる鍵の中を

梅尾

こころもくまふ石もくまふ細小路

理路

薄衣のゆきまのくれり

虎造

春物代はゆきもなすよ候を

坂原

栞のりくまをぬれたり

系衣



あゝ〜大恩天おふこ〜

八日 九日 三十日 朔日 里石

長續のすふら〜海牙清 可水

肩さ〜〜〜湯上り 共一

程々〜田子北浦迄の夕燈 可交

鳴々〜ま玉う何れきうも 里水

新水〜海々〜高橋河本の苗を 千里

阿のハ神候海を押し〜 和歌

二

海〜〜市心移〜氣の荒れ〜 潜跡

陸〜〜川〜山宮迄〜の 九梅

人の知〜ぬや〜少〜序を〜〜刀 流枝

若ふ〜何の聲〜斗〜成〜少〜 招水

海〜〜今〜年〜の〜牛〜の〜ま〜ま〜 其梅

ち〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 右友

沖〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 貞矢

海〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 其流



言ふは勝手の悪くもなり

菊

難中さくもきんはもひハ

竜玉

東てとすし月又のまは近心内

板

中世は海よ寂しぬ岸里

志中

遠く家あかしくしと門板の音

藤

さしと出んていふは作摩生

白

石はた何ふもつとけり

藤枝

花は移るくまの物なり又ハ

柳志

咲はよきよ遠りりむむ小虫

壺

花はよきよ遠りりむむ小虫

素

其五 三ツ物

高月や露をくくくす男ぬき秋の萩

藤枝

澄りてとけりく月の小節

文

冠七も此後を涼くきて

文

其六 續文

朝道よ色道よ軍くや板の白

藤枝



月よ 儂原のふ此む旅

文起

彼よと 若ふもあふ秋文て

竜崎

兼 野丸、又さよ 若ふも

和丸

式 月よ 若ふも 肉曲 帰

古北

三 登十 備し きて 化 糖 湯

又胡

田 若 時 若 若 の 若 若 若 若

十産

若 若 若 若 中 若 若 若

梅林

若 若 若 若 若 若 若 若

里北

若 若 境 若 若 若 若 村

有津

若 若 若 若 若 若 若 若

可造

若 若 若 若 若 若 若 若

板形

若 若 若 若 若 若 若 若

若月

若 若 若 若 若 若 若 若

若津

若 若 若 若 若 若 若 若

村西

若 若 若 若 若 若 若 若

上院

若 若 若 若 若 若 若 若

二松



子孫の福の利を  
 徳に近し一月の嘉事やう  
 時ふらふらと起る休勢  
 如くは後の事やう又嘉徳の  
 澤水と云ふ事とすん布  
 徳より角より繁ふ事成むと云  
 徳も事と千金の事  
 利生  
 如園  
 以治  
 繁園

其七 三ツ物

次々たる如くふらふ事成る事  
 徳に合  
 洗平

世に遠化の月此廣  
 徳の如くふらふ事成る事  
 更に  
 如風

其八 八白素

新松園  
 高更

五月十日此事と云ふ事  
 自  
 支記  
 危胎  
 如友



持して病を<sup>あ</sup>はれ<sup>は</sup>はらへし<sup>は</sup>船の<sup>は</sup>はらへし<sup>は</sup> 一校

冥に<sup>あ</sup>はれ<sup>は</sup>はらへし<sup>は</sup>と<sup>は</sup>在<sup>は</sup>入<sup>は</sup> 表流

年の内ふくくも<sup>は</sup>まを<sup>は</sup>追<sup>は</sup> 離<sup>は</sup> 己未

雪の<sup>あ</sup>はれ<sup>は</sup>はらへし<sup>は</sup>と<sup>は</sup>在<sup>は</sup>入<sup>は</sup> 年

其九 三ッ物

湖の<sup>あ</sup>はれ<sup>は</sup>はらへし<sup>は</sup>と<sup>は</sup>在<sup>は</sup>入<sup>は</sup> 可造

水干きくも<sup>は</sup>まを<sup>は</sup>追<sup>は</sup> 離<sup>は</sup> 夏

遠く<sup>あ</sup>はれ<sup>は</sup>はらへし<sup>は</sup>と<sup>は</sup>在<sup>は</sup>入<sup>は</sup> 和

急流

櫻うんで<sup>あ</sup>はれ<sup>は</sup>はらへし<sup>は</sup>と<sup>は</sup>在<sup>は</sup>入<sup>は</sup> 林岫

長閑さ<sup>あ</sup>はれ<sup>は</sup>はらへし<sup>は</sup>と<sup>は</sup>在<sup>は</sup>入<sup>は</sup> 素

道<sup>あ</sup>はれ<sup>は</sup>はらへし<sup>は</sup>と<sup>は</sup>在<sup>は</sup>入<sup>は</sup> 吟眺

一<sup>あ</sup>はれ<sup>は</sup>はらへし<sup>は</sup>と<sup>は</sup>在<sup>は</sup>入<sup>は</sup> 蒼

琵琶<sup>あ</sup>はれ<sup>は</sup>はらへし<sup>は</sup>と<sup>は</sup>在<sup>は</sup>入<sup>は</sup> 遠

山吹<sup>あ</sup>はれ<sup>は</sup>はらへし<sup>は</sup>と<sup>は</sup>在<sup>は</sup>入<sup>は</sup> 冠

道堂<sup>あ</sup>はれ<sup>は</sup>はらへし<sup>は</sup>と<sup>は</sup>在<sup>は</sup>入<sup>は</sup> 小



入梅時やきふく月の露法師 等流  
 梅の葉や落きては二日三日 亡骸  
 ちり雪もわしはふゆりやふゆ月 浴会  
 露法師のきよふるとりえふ 美言  
 糸切ぬてえおろそやれ中 礎石  
 穂雪の中凡のすゑも思ひぬ 法衣  
 藤葉や角方葉ふふふとふ 里典  
 竹ふく流りゆふよと火ふ 激中

梅くやむ枝はほろろわろろ 女 宣表  
 雪ふく一ねえゆり梅雪花 礎石  
 水雪やふくふとふふふ 女 柳之  
 柳ふくふとふとふと 女 柳之  
 月露の露ふくふとふと 女 柳之  
 迎ふふふふふふふ 五柳  
 ちり雪もわしはふゆりやふゆ月 己不  
 糸切ぬてえおろそやれ中 角







暮るはまの妻もほほ秋の月  
 活てふはまの妻もほほ牡丹の  
 月此夜くまては海の月己家  
 世へ飛んで暮とちるは氣の  
 又て折月、孝り娘のまゝに  
 新葉くまてはつくり口永る  
 正寄と婦嫁深可まはる葉の  
 等やまゝは白はらけはけは

欽古  
 白風  
 虎造  
 古地  
 可造  
 又羽  
 了是  
 志中

落葉や慈子 折ふくまきと  
 寄心そはぬもぬき目もん  
 孫より成るよまてはるの口永  
 白よまゝは新葉のゆりや秋の  
 さい〜はほじん全葉や落  
 娘の女はかては友結ふはの月  
 慈小折て笑ひあふも山  
 仇先て牛椋安けく暮はふ

梅危  
 影圓  
 素色  
 志友  
 極新  
 森陸  
 一枝  
 及悟



男あつたて帰らむ 碓氷 水  
 雨の日は眠る 権りあり 秋の土 其梅  
 月影波 嘆て暮れや 暮麦の花 和歌  
 新厄の 桐子 高れぬ きのこ 了  
 活りよ 暮れも ちと 暮れ 秋の土 一のま  
 米炊く 流の ちと 米や 牡丹 其一  
 三漆の 誤 織の 波 ちと 米よ 時 水  
 麻 啼や 嘆と ちと 苔 辰 越へ 水

足高と ちと 惚川 ちと 水 了  
 水 形も 舟 舟 ちと 米 種 流  
 加 了 舟 舟 ちと 米 種 流  
 足高と 又 居 舟 舟 種 流  
 海 廣し 暮 舟 舟 種 流  
 沖 以 あり 計の ちと 米 種 流  
 ちとの ちと 暮 舟 舟 種 流  
 ちと ちと 暮 舟 舟 種 流















小神の杖 杖乃自、吹

松舎

降りし、流むも神系小

以友

時少をあてて時久の

松舎

何七も牛小まうして

里秋

以云家傾とや初く

一虎

初初ぬ方七独好れ

吹舎

能く有少と王と世

呂明

うさ月しりと暑も

英嬰

梅六、疾癖汁の

葉巻

きね、疾いし

松七

いし、結子の

素巻

さし、流れを

午秋

何きやん一好二好

柳子

諫斗、とく

松石

下り、波志の

掬舎

き、眠く月も

凡可



系 毎よ 迄て 表の 白 妙 赤 舌

采 あり 経 昔 せ あり 布 五 代 里 着 心

後 仕 の 幸 と 指 好 て 又 一 佳 一

未 廣 く じ ゃ 何 々 と 香 を 合 へ 子 花

ほ く 風 雅 も 其 故 系 好 子 可 曜

長二 八白表 都 漢 文 門 葉 葵 園

雄 雌

名 月 や 灯 心 せ 此 小 登

繼 子 余 け へ 高 け へ 友 交 在

ち 小 の 新 田 娘 可 小 正 十 辰 不 娘 泉

幼 々 娘 名 不 々 中 の 毒 心 千 旅

今 へ 々 々 鳴 け あり 此 楓 川 急 令

ま 小 悲 しい 故 人 の 恋 叶 習

涙 中 へ ぬ 煙 心 へ 泣 け ば 中 へ 泣 け 雨 暈

心 寄 け 哀 小 々 々 々 々 以 代 年

心 寄 け 哀 小 々 々 々 々 以 代

心 寄 け 哀 小 々 々 々 々 以 代 湘 松 鏡 泉



心の井此をそとせぬ花菜ふ 女 千能

ちろくく月と色くおとけり之月由 凌雲鏡 念全

思ひ流し月の夜をわく渡り 昔の橋 町習

草花舞蝶くおと古哉場 芳山亭 白暎

花よきも松かき夢く拓世 草花園 雄雌

其二 類方一好

唯唐 友琴

舞は草花子子蝶の羽かきとせふ

月よ花しり小遊の依 また

秋寂寂瑞ひ来し菊の冷あつて 来水

ちろくく一筆さくまよと 手原

之節の市此介少も市きり 手番

ちろくく境々ぬおよ町由此 菊

去りそそと進んぬおと村火津 以

花よしり花の進んぬ人氣ふ 燈

おゆふ不遠此浦の流の春 子 彩

心はしり風かやふき 不 及



従言解めと鳥帽子と従て去ん 何書

及代草一の時と衣文忌 芦中

其四之つ物

五月廿二日

きくねねとすふあつとけよき海 掬水

月と女易小造化の自然 変取

世季くく如増茂神の若りて 之原

名録

婦もすく我あゆりて離る 掬水

涼凡中級格きま心人 渾り 改書

廉帯中情の人くおめり 芦中

暖中孫うまふわと町と川色 何書

花ふきもすくす信しとよ金きくふ 小糸

青の汐もすくすはとて楓の香 甚書

さくしと物と座のやと川様 不及

若小膝く落紙きとちりしと風 徳也

活くと竹書くくわらと望梅可 之原



暮れおや暮日るひー古尾 左琴

其五ノッ也

戎馬りま 里秋

鴨々月々むとるる夕アふ

月と二日の暮 蔭お瀬 又た

うら指を聖あしきふ神ありて 又秋

其六ノッ也

海澤園 小啓

畧よましく社とゆらきふ

眺め初く月のお山 又た

中々心寂まの心しるる 又計

其七ノッ也

翁御やたれそ暮むれ海りき 又秋

よも湯さあそ月の標先 又た

夕くも夕の夕人たる枯て 又計

釋ふ仲も仲も可ふあし 又竹

望遠の里の時あふふれさく 又水

傍火のほふらき侍のふ 又乙



其ハニツ物

葉月を

かき  
明

庭裏や葉毎くく一匹の

福りー葉の月の日の  
また

くやふん 秋もき布祿の神ありて  
す中

其九ニツ物

かき

有光

奇きより秋と淋ー秋の葉

氣くーふの月の枝物戸  
また

山おの 秋のや 葉のおふいふて  
鳥也

其十八の表

かき

南作

康のきや折く凡此吹送

夜はきふ月の一ツ葉  
また

葉くきる青おの 秋の冷くて  
山陰

及ちふもあふ秋神わけとあ  
月可

福も 秋より中風海の人  
さき

ふ物く 秋名漢屋赤味明  
可懼

張りく 秋例久きぬ 蝶拂  
涼山紙



終の一字は書も深き 着茂

名詠

一 暮小 暮暮 暮暮 暮暮 暮暮	山陰
涼し 中ら 対 暮の 所	其地
惟 終 中 け け 暮 暮	古中
手 暮 暮 暮 暮 暮 暮	暮光
暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮	暮秋
暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮	暮步

ぬ 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮	着茂
く 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮	暮三
娘 の 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮	利曉
一 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮	凡竹
秋 の 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮	有佳
涼 し 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮	む友
長 町 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮	松七
暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮	五竹











新

新々もは別れて日暮るの由

夕暮

下戸のまゝは久よしあやの月

琴糸

松尾よ夢をささぐりて久よ

芳哉

さうさうの松の葉も水も

南井

水よ水よさうくはなすの夢

水水

いそいそと水も

水水

いそいそと水も

水水

いそいそと水も

水水



